

令和6年度第2回多治見市総合教育会議 議事録

(要点筆記)

日 時：令和7年2月27日（木）午後3時00分 ～ 午後5時15分

場 所：多治見市役所駅北庁舎4階第3会議室

出席者：【会議構成員】

多治見市長	高木 貴行
教育長	仙石 浩之
教育委員（職務代理者）	大嶽 和好
教育委員	鈴木 亜紀子
教育委員	水野 豊
教育委員	渡邊 加余子

【事務局】

《教育委員会》

熊崎副教育長、東山教育次長、丸山教育指導監、山本教育総務課長、丹羽教育推進課主幹、前田教育研究所長、渡辺食育推進課長、伊藤福祉部課長（放課後児童健全育成調整担当）、南谷課長代理（教育推進課）、山田課長代理（教育総務課）、高田課長代理（教育総務課）、古川指導主事（教育相談室）、水野課長代理（食育推進課）、村瀬主査（教育総務課）

《市長部局》

細江総括主査（企画防災課）

《校長会》

国府田小中学校校長会会長（陶都中学校校長）

【説明者】

古川指導主事（教育相談室）

【事務局】

ただいまから令和6年度第2回多治見市総合教育会議を始める。本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律において、教育大綱や、教育を行うための諸条件の整備、その他の地域の実情に応じて教育等、重点的に講ずべき施策などについて協議を行う会議と定められており、地方公共団体の長である多治見市長が招集するものである。

まず、開会に当たり、市長と教育長からご挨拶頂く。

【市長】

皆さん改めましてこんにちは。今日は令和6年度第2回多治見市総合教育会議にご参加賜り厚くお礼申し上げたい。私が市長に就任して2年目であるが、1年目は前例踏襲

で1回だけの総合教育会議であった。私が就任してからは2回の開催とさせていただいた。今回は、初めての2回目の開催である。

1回目はデジタルについてで、GIGAスクール構想も含め、皆さんからいろんなご意見を賜り、私としても大変参考になった。今回は、どの地域でも、どの学校でも課題になっている不登校について多治見市の現状と対策を皆さんと情報共有をさせていただきながら、どういう対応が適切なのか、また、今の子どもたちが、どういう価値を持っているのか把握をし、教育委員会として、学校とし、何ができるか議論を深めていきたい。

私自身も子どもの親ではあるが、やはり生活の大半が家庭であり、不登校の問題は学校の関わりはあるものの、家庭だとか、地域等も大いに関係していることも理解している。とはいえ、我々教育界に携わる者が、それを言ってしまったら、子どもたちに大変申し訳ないことになる。学校として、教員として、子どもたちのために何ができるか、深く議論を進めさせていただければ大変助かる。そういう意味で、皆さんの思いや考えをしっかりと出していただける会議になることをお願い申し上げたい。

もう一つ、せっかくなので、先般発表された中京学院大学の件を少しお話させていただきたい。当市にとっては初めての4年制大学の誘致ということとなり、これこそ子どもたちの教育現場においてはまた大きく環境変化につながってくると感じている。市政全体を見ても、この大学が来るということは、経済的な部分、人財育成的な部分も含めて、大きなインパクトがあると思う。我々にとって大きなインパクトがある反面、瑞浪市や中津川市からすれば、マイナス的な大きなインパクトが現在あると印象を持っている。内々に約1年ちょっとこの議論を進めてきたが、中京学院大学の皆さんは、この東濃で初めて設置した4年制大学を何としてもこの東濃で残したいという思いを持っていたし、そこから議論がスタートした。当然ながら、人口が多い愛知県、春日井や瀬戸などいろんな候補地があったにもかかわらず、この東濃に残したいという思いを多治見市にしっかりと伝えていただいた。我々としてもそこに賛同し、多治見に何ができるんだろうか、どういうふうに議論に参加できるかということからスタートした。その結果、やはり多治見で何とかやっていきたいと中京学院大学様に選んで頂いたのは、大変光栄に思いうし、今まで皆さんが市政運営をしっかりとできていただいたおかげだと思っている。

その話の先として、候補地としてどこがあるのかいろいろ議論をさせていただいた。駅周辺がいいのではないかという話もあった。当然ながら4年制大学には文部科学省の設置基準があるので、それ相応の広さも必要である。そうなったときに、候補地としてどこがいいのか検討したところ、笠原小中学校一貫教育で小学校の土地に統合しているので、残った中学校の跡地を活用するという結論となった。とはいえ、笑い話だが、笠原であれば、瑞浪でもよかったのではないかという意見も聞いているし、少し駅から離れているのではないかという話も聞いている。しかし、これは新聞等々でも書いていただいているが、笠原だからこそ、例えば瀬戸や豊田等は、瀬戸の名鉄、バスに乗れるのではないかなど、中京学院大学がいろんなマーケティング等行った上での結果である。我々が選んだわけではなく、中京学院大学さんが、しっかりとマーケットの中で選んで頂いた。これも是非、ご理解をしていただければありがたい。今後は議会の議決を経て、また市民の理解も得て、どのように大学運営を行っていくかは約2年かけて議論を進めていく。と

はいえ、もう2年しかなく、教育委員の皆さんにも、いろいろお知恵だとかアイデアを頂かなければいけないし、また、地元である笠原の皆さんにも、十分な理解も得ていかなければいけないと思っている。中京学院大学に来ていただくときは、確か創立60周年のようだが、せっかく中京学院大学に来ていただけるので、そこから更に次の100年に向けて、多治見で子どもたちを育める大学運営を、本市としてもしっかりと連携をしていきたい。是非、皆さんにはいろんな部分でまたご理解とご協力、更に言えば、連携に対するアドバイスを頂ければ大変ありがたい。また、今日はいろんな議論の中で、皆さんの疑問点があれば、何なりと、質問していただければ、私も答えられる範囲でお答えさせていただくので、ご意見を賜れば大変助かる。

【教育長】

今の市長の挨拶に即してお話をさせていただくと、実は総合教育会議が1回から2回のインパクトは他市にも影響があったようである。他の市もこれまで大体年1回の開催だったが、東濃の教育長会議で話をする中で、中津川市の教育長も市長の指示で2回開催するとお話されていたし、他の市も2回へ移行していくところが多いと聞いた。法律で定められているのでアリバイ的に1回だけやっておけばいいという時代ではなくて、それぞれ本音でしっかりと意見交換をするような、そういう機会を増やしていくのは時代の流れであり、ある意味先陣を切ったのではないかと感じている。

今日は総合教育会議の構成が二部構成になっていて、一部は資料にあるように不登校についてであるが、これは昨年も議論していただいております、その後の動き等を踏まえて、改めてテーマを絞った議論をしていこうと思っている。第二部は自由討議になっている。自由討議の中で、特に今中京学院大学の誘致に関するインパクトは大きいので、教育委員に是非、いろんなご意見をいただければと思う。先程、教育委員から、小中高大の連携という単語も出てきたが、その点について教育委員会としても期待するところが非常に大きい。それ以外にも、笠原小中学校について実は先週、研究会があり、校歌の決定など、かなり具体的な中身の決定事項が幾つか積み重なってきたような段階なので、その辺ももし触れられたら触れたいなと考えている。自由闊達な意見交換ができればと思うので、よろしく願いしたい。

議題

(1) 多治見市の不登校等の現状と対策

説明 教育相談室 古川指導主事

【市長】

校内教育支援室の小学校44名、中学校79名は不登校でカウントされているのか、されていないのか。

【事務局】

両方ある。校内教育支援室に通えている子は出席扱いとなり、不登校にカウントされない。一方で、週1、2回の通学の児童生徒は不登校扱いとなる。

【市長】

さわらび、フリースクールに通っている児童生徒は、不登校にカウントされているのか。

【事務局】

されていない。

【教育委員】

資料1 ページ1. 多治見市の現状 (1) ③不登校の要因で「無気力・不安」が第1位に挙げられているが、詳細な項目のデータはあるか。

【事務局】

ない。これについては昨年度もご意見を頂いており、何によって「無気力・不安」なのか知ることが一番大事じゃないかと我々も思っているが、国の分類がこのようなになっている。それによる経年変化を見ており、学校がどれかに当てはめるときに、無気力不安として、上げてくるケースが非常に多い。

【教育委員】

国の基準で合わせるのはそれでいいと思うが、現状をしっかりと把握するためには、市で詳細な項目にするか、自由記載にしてもらうことを検討してはどうか。

【事務局】

毎月、長欠報告として、ここに挙がってくる児童生徒については、家庭での様子であるとか学校との連携の様子等を文章表記で報告していただいている。それを参考にしながら、更に分類は、細かくできたらいいと考えている。

【教育長】

私も去年、この会議で、今、教育委員さんの言われたように、「無気力・不安」だけでは対策の立てようがないから、もう少し分析をするよう言った記憶がある。しかし、この1年、いろんな先生、関係者の話を聞くと、どうもこの曖昧な理由が、実は的を射ている部分があるようである。要は本人ですら何で行きたくないかが分かっていないことが最近多いという印象を持っている。だからこそ今、しっかりと話を聞くことにより、個別の理由を聞き出し、それをうまく分類して対策につなげられるかが、多分、現実の解決策になると思う。

【校長会会長】

今、教育長が言われたとおり、特に低学年は、自分でも理由が分かっていない。気持ちが顕在化することが、良いことなのか悪いことなのかも分からない。

以前、自分が関わった児童生徒の中で、小学校5年生から完全不登校、ひきこもりで部屋から出てこなかった子がいたが、コロナ禍で分散登校になったときに、本人が望んで登校しだした。どうして登校できたか、そのときは余りにもデリケートだから、私たちも聞くのは控えた。保護者のせいにするわけにはいかないし、聞くことは、不安になっている児童生徒に対して、躊躇するところがある。登校が安定したので、随分経ってから、どんな気持ちの変化があったのか聞いたら、数学の先生が配信していた動画を見て、「僕はこれなら勉強分かるかもしれないと思って、高校行きたくなかったから、ちょっと授業を受けてみようかなと思った」と言った。

その子は、その時既に中学校3年生であったが、相談室でオンラインで授業を受けて、すごく勉強して志望校に進学した。ずっと不登校対策とかいろんな経験をしたが、全欠だった子が、コロナ禍で進んで登校したのは私にとって衝撃だった。その子に、中3のときに不登校の理由を聞いたら、小学5年生のときは「何か辛かった」と言った。「どんな辛さだったか、今後参考になるかもしれないから教えて」と言ったら、「人と関わるのが、すごく辛くて、うまく言葉にできない自分が嫌だった」と言った。初めてそれを中学3年生の進学が決まるときに聞いた。保護者の方もすごく自分を責めていて、お子さんが登校できないことに対してすごく辛い思いをしているので、なぜ登校できないのか私達はなかなか聞けなかった。カウンセラーさんと面談して、母親も2年、3年とカウンセリングする中で、これまでの自分達の対応がまずかったのだろうかとか、気持ちを開示されるようになった。分析はしたいところだが、その時になかなか立ち入るっていうことが、様々なケースで難しい。最近是不安障害とか、起立性調節障害とか、診断書が出るようになった。そういったお子さんに対しては「無気力・不安」でカウントしやすいと思うが、そうではないお子さんもたくさんいらっしゃる、デリケートな問題で取り組むことが難しい。

【事務局】

統計上「無気力・不安」で分類はしているが、学校では個別の状況をずっと捉えて、原因と対策の組立てをしていく。

【教育委員】

令和7年度の目標で、「学校とつながらない子を0人にする」とある。昨日PTAの家庭教育委員会で小児科医の先生とさわらび（教育支援センター）の先生とのパネルディスカッションがあった。そこで不登校の背景には不安があるということだった。学校とのつながりをゼロにするのはいいが、学校に対して不安を持っている子をゼロにするというのはハードルが高い。そこで、他機関との連携をもう少し図って間接的につながる方向はないのかと思う。

【事務局】

学校とつながるっていうのは1番の目標だが、その子の状況によっては、つながり方は吟味しないといけないと思っている。医療とつながっていく方が効果的であれば、医療とつながればいいが、学校もその情報を知っておきたい。そういった意味で、連携を図っていく。医療や他の教育支援センターと学校が連携を図っていくとか、そういったことで関わりをつくっていくことが大事で、直接的でなくても、いろんなベクトルはあると考えている。

【教育委員】

医療機関だけでなく、ジュニアクラブ等とつながりがあるかもしれない。そういったところと情報交換することで連携を図るというのは難しいか。

【事務局】

不可能ではないと思っている。

【教育委員】

ある小学校で不登校ではないが、困り感のある子どもの対応について、担任が非常に

悩んだことがあり、学校内の担当者、学校外のいろんな関係機関で協力しあって改善していった例があった。大切なことは、チームとして取り組むことが必要ということ。不登校であれば、なおさらいろんなところからの働きかけがあっていいかと思う。多治見市は比較的多方面からの働きかけがある。小泉中学校と池田小学校でトライサポーターを設置して効果をあげたと聞いている。具体的にどのようなことを行ったか知りたい。

【事務局】

トライサポーターの配置校による今年度の報告で、今まで学校に行けていなかった子が来られるようになった、学校へ来たときにいる時間が長くなった等、具体的な話を聞くことができた。また、12月時点の不登校者数を昨年度と比較すると、池田小学校では7名、小泉中学校では9名の減少が見られた。昨年度と比較して登校するお子さんが増加し、数字的には大きな成果があると思う。トライサポーターが、その場で一生懸命、本人の意思決定を大事にしながら、運営をしてくれている。自分自身の意思が尊重される場であるということが非常に大きな効果だったのではないかと考える。

【教育長】

数字だけでなく、どんな変容があったか補足して欲しい。

【事務局】

例えば小泉中学校では、校内教育支援室を利用するお子さんについて、学校でケース会議を行って、この子については、こういう使い方をしていこう、促していこうなど話し合う。保護者の方とも合意形成をしながら、半日登校でまずは1か月間頑張ってみよう決めたりする。登校したときに、今日はどういうスケジュールで過ごすか自分で決めもらう。1時間目はここで学習する、2時間目は教室へ行ってみる、3時間目は休む。4時間目は相談するとか、トライサポーターが寄り添いながら、時間割について自己決定をして、半日過ごす。決めたことについてはしっかり守って、「またあした元気で来てね」と言って、それを繰り返す。1か月ぐらいしたら、今こういう状況にあるから、次の目標としてちょっと時間を延ばして給食を食べるまでにしてみようかとか、そういった確認をしていくことを実際にやっていた。

【教育委員】

効果があるのであれば、今後他の学校でも設置する予定はあるのか。

【事務局】

トライサポーターについては、今後増員する予定である。

【教育長】

トライサポーターを置いたところは数字が非常に好転しているということは確かであるが、その理由がこういう制度をつくったから好転したのか、それともたまたま配置した2人が、適任であったのか。私から見ると、この2人が非常に適任だった。制度もあるが、2人だからこういう数字になったと思っている。方向性としては今後増やす方向であるが、ただ制度だけつくって、誰でもいいから配置するとしてしまっただけでは、効果は薄いと思っている。適任者を配置するというベースがあって、少しずつ増やしていくという形にしていかなければいけないと感じている。

【市長】

今、教育の質の話が出た。私も子どもがいるし、いろんな保護者の方とお話をさせていただくが、教員の質の問題について賛否両論聞く。大変子供心をくすぐりながら授業をやる教員もいれば、昔からあるような授業をする教員もいる。例えば、とある先生が担任になると、不登校が増えるとか、そういうことを調べたことはあるのか。私も過去にいろんな先生たちを見てきたが、クレームが出るのは同じ先生ということがよくある。どこ

の学校に行っても、結局クレームが出る。
低学年に不登校が増えてきていることに僕は、非常に課題だと感じている。なぜなら、子どもたちにとって、学校は本来であれば楽しいところだと思っているから。先生のリードの仕方によって、入り口で失敗すると、ミスリードになってしまう。先程、校長先生の話で、不登校の生徒が他の先生の動画を見て楽しそうだったから、学校に行きたいと言ったという話を聞いたが、その現場の先生たちはどのように授業をされていたのか、逆に僕は不思議に思った。低学年のリードも先生の質だと思っている。そこを本当に担保されているのか、調べたことはあるのか。

【事務局】

そういう調査はやったことがないが、保護者からの教員へのクレームは蓄積して記録として残している。クレームに対して、保護者の方、教師、生徒の話を聞き、教員に改善すべきところがあれば、指導している。

【市長】

人それぞれ適材適所があると思う。大きく分ければ小学校の低学年、中学年を担当する教員、またその高学年、更には中学校に、パズルの穴埋めではなくて、教育委員会がデータの蓄積から、配置を検討した方がいいのではないかな。誰が子どもにとって有益なのか、意見が出ている先生たちも合う環境はどこなのか、そこまで考える必要があるのではないかな。クレームがある先生は、どこの学校でも同じ先生の名前が出てくる。これは、皆さん感じていると思う。だけどその先生はどこで活躍できるのかまで考えたことはあるのか。

【教育長】

かなり踏み込んだご意見なので、現場を預かる担当として本音で答えてもらえばいい。

私は、教員の人事担当者は適材適所をかなり配慮しながら人事異動を行っている認識している。事務局は、統一的な調査をやっていないとは答えたが、実は蓄積された情報をもとに、相当苦労して人事配置をしている姿を自分は見ている。

【事務局】

大部分の正規職員というのは県費職員なので、県から配置され、各市町村へ、必要な数、配置される。当然、いろんな先生がいるが、全て1として数える。例えば、非常に指導が厳しい先生についても1であるし、いわゆる世の中でいうと人気のある先生も、1で数える。先生にいろんな問題があれば問題の生じないようなところへ配置するようにし、小さなお子さんだとすごく頑張れる先生には、低学年、中学年に配置するようにしている。特別支援学級であれば、子どもに寄り添っていける先生を考えながら、当然配置をしていく。男性、女性、若い、年配のベテラン等全部含めて、いわゆる適材適所になるようにしている。また、全ての小・中学校が平等になるように配置をしている。しかし、あ

るものでしか配置できないのが現状である。先生にいろいろと問題があったとしても、使えない、やめてとはなかなかできない。そこも含めて全てを配置している。

【市長】

そうなると教育の質で考えると、そういう先生をどうしていくかっていうことも今後は多治見市として議論していかなければならない。先生にどういう研修を受けてもらうかも一つの課題だと思う。教育長からトライサポーターの2人が良かったという話を聞いたので、先生の質のことを言いすぎたかもしれない。自分も今、人事異動をやっており、今いる職員達をどこにやるかで非常に悩んでいる。みんなを1としてカウントしているわけで、誰かを外すわけにもいかない、それは私もよく分かる。ただ、子どもたちのところの不登校を考えると、その先生の質というところをしっかりと追究しておかないと、次の議論にいけない。

【事務局】

更に現状をお話しさせていただくと、先生が足りないという報道はよくあると思うが、多治見市も少なからず今、人が足りない。下手をすると担任がいらないという学校が生まれる。定数は決まっているが、定数に達しないという状況で非常に苦慮した。本当だったら、余裕があれば加配という先生がついて、定数ではないけれども、少人数指導でプラスアルファの先生をつけるとか、そういったことも県はやれる。しかし、全ての学校に担任がつくような配置をまずしないと、成り立たないというのが現状である。小学校でいうと、学校には校長先生、教頭先生、教務主任の先生がいるが、それらの先生以外は全員担任じゃないと成り立たない。フリーの先生はゼロで、多分、1時間目に職員室に行くと、全ての者が担任をやっているから誰もいない。今、先生に休まれると、教務主任の先生が担任をやらないと多分、成り立たない。

【教育委員】

母親としての話をするが、私の知っている子で、中2で不登校になり、中3になったら担任の先生が変わって登校できるようになった子がいた。中3の先生も素敵な先生であったが、中2の先生も素敵な先生であった。私の娘からしたら、中1のときは学校に行きたくないと言っていたが、2年生になったら行きやすくなったと言っていた。質の問題もあるが、先生が悪いというわけではなくて、単純な相性というのも多分あると思うし、タイミングもある。一生懸命、学級とか担任を配置してくださっていることはもちろん分かっているが、4月の1回しかそのチャンスがないって結構大変なことだと思う。なので、なるべく多くの先生が1人の子どもに接することができるように間口は空けておいてほしい。担任の先生で子どもが学校行くかどうかが決まるのではなく、担任の先生が本人にとっては外れだったとしても、他の先生が来てくれて、他の先生が誘ってくれたら学校行くようになるように、なるべく子どもにとって関わる大人の数を広げるっていうのは担保しておいていただきたい。誰かが原因だからその人をどうするかっていうのはできる部分とできない部分がある。

低学年の不登校問題について、以前、幼稚園保育園がこんなに面白い教育してくれているのに小学校入ったら急につまらなくなるとここでも言ったことがあるが、精華小学校の校長先生が、幼稚園に教えを請いに行ったって言っていた。ああいうことをもっと

先生たちにやってほしい。幼稚園保育園では、人間にとって大事なことを大切に育ててくれていると思う。小中学校の先生になると、急に何か違うことを言い始める感じがするので、小学校中学校の先生にも、幼稚園保育園に学ぶ機会があってもいいのではないかと私は思う。

【事務局】

確かに納得するところが多いが、幼稚園保育園でいくと、約20人の中で支援員が2人いる。だが、小学校1年生になると、35人に1人の教員で、このギャップも大きい。小学校になると授業もしなければいけないし、時間に追われる。小学校低学年の担任というのは、私はやったことないが、群を集団にまとめていくようなところもあり、なかなか難しさがあると思う。1年生を担当する先生方に対して、学校としての支援も必要だが、幼稚園保育園の先生方には逆に小学校ではこういう状況となるから、徐々に支援の手を削いでいくことを要望するなど、交流していくことが大事かなと考えている。

【教育長】

幼稚園保育園へ小学校の先生が行ったり、保育士が小学校へ来ることは既に始まっている。それを説明して欲しい。

【事務局】

先日、地区の教育懇談会があり、北陵中学校区に行ってきた。そのときは、保育園の先生方が、小学校1年生の子たちの様子を見に来て、成長や、指導についてお互い交流をする場面もあった。北陵中学校区でいうと、幼保、小中が連携をとりながら、地域ぐるみで教育が進んできていると実感した。

【事務局】

昨年度、多治見市で幼保小中一貫教育基本方針取りまとめた。その方針を持って、中学校区ごとに、情報共有、連絡等取り組んでいく。北陵中校区の話もその一つであるし、以前と比べると、小学校に幼稚園保育園の先生が来たり、あるいは子どもが一緒に来てくれる機会が増えた。ただ、なかなか小学校から幼稚園に行くのはまだまだ進められていない。いくつかの幼稚園保育園から小学校へ来ていることも原因と思われるが、そのあたりは課題だと思っている。

【教育委員】

不登校の未然防止として、幼保小の連携、引継ぎの強化等あるが、学校の教育活動の中心はやはりクラス単位の授業だと思う。授業がどんなふうに行われているかをお互いによく見て聞いて、認識をしていただき、検討されたことを必ず他の先生に供給するような形で、学校なりでしっかりと話していただきたい。既に行われているとは思いますが、こういう現状であって、こういう子たちが入学してきているということを共通の認識として持って欲しい。先程の教育委員会の会議の中で、中学校の校長先生から頂いた資料の中に、不登校のきっかけとして、「学業不振」「教職員への不安」、「病院」が挙がっていた。やはり授業が大切で、先程のお話にあったように、配信された授業の様子を見て、興味を持ち、すごく面白いと思ったことが登校のきっかけになるということもあると思う。それぞれどんな授業をしているか、お互いに見聞きし、授業を中心にした連携をすることもすごく大事かなと思う。

それから、教員の質もある。教育力はいっぱいあると思うが、その中で、子どもたちが言っていることをしっかり聞くこと、話すこと、プラス記録するということが大切。記録したことが全て指導にヒットするかどうかは分からないが、空振りは問題ない。見過ごし、見逃しが禁物だと思う。だから、話したり聞いたりしたことをしっかり記録しておき、それをどこかで引き出す。授業の中で、「誰々さんも言ってたけど、面白かったよね、これ話してみるよ」と言ったら、取りあえず、それなりにうれしいであろう。また、先生はちゃんと聞いていてくれるなと思うであろう。例え一対一のやり取りであっても、他の30数名は全部見ているので、先生に対する信頼とか、授業に対する関心度が違ってくる。いろいろ科目評価があるが、基本的なところでやっぱり話す力、聞く力は1番大切である。プラスそれを記録していく力、活用していく力が大事だと思う。

校内人事のことを言えば、小学校1年生の不登校者数が増加というのはとても大事なことかと思う。小学校1年生に関しては比較的指導経験のある先生が担任されることが多いという理解でいいか。

【事務局】

特に1年生、それから6年生の卒業生として送り出すところは、経験があり、子どもたちのしつけという部分も含めた、そういった学校生活への第一歩を教えていける、本当にスーパースターのような先生が配置されている。初めて先生になった方が小1を担当するのはなかなかないと思う。先程、市長が言われたように、低学年の子が不登校になるのは自分たちもショックである。小学校に登校できなくなった理由として、例えばいじめられて人間関係が嫌で不登校になったというのは、よく世間的にはイメージされていると思う。実はそういったものは原因がはっきりしていて、我々がきちっと対応していけば、その原因を取り除いていくことができる。ところが、小学校1年生で、まだ人間関係の構築の過程や、思春期にも至っていない子たちが、学校を嫌がって登校できないのはなぜかと自分でもいつも問いかけている。

今日、実はさわらびの卒業祝いがあって、7人の子が来てくれた。全員の子が、なぜ不登校になったかカミングアウトしてくれた。そういう場で普段はとても言える子達ではないのに、大勢の中で話をしてくれた。「小学校4年生で突然行かなくなりました」「行くのが嫌になりました」「自分が耐えられなくなって」とか。「だけど、さわらびに来て不安だったけど、何か声かけてくれたらすごくうれしくて友達ができた」「自分が主役になっていけるような気がした」と。自分が思うに、集団生活が苦しいという子が今多い。小人数でとか、自分が主役でやっていると、頑張れるっていうのはあると思う。さわらびの子たちがすごく立派だった。全然口も聞けないような感じの子が「僕ここに来てしゃべれるようになった」というようなことを聞くと、その子たちに合った機会を用意していくことが必要と感じる。それを今後、各学校に部屋を用意できないかと自分は考えている。

【事務局】

現在、幼稚園保育園から小学校1年生に進学した際のギャップが課題になっており、幼保小の連携強化を図っており、事務局から説明をする。

【事務局】

幼稚園、保育園では、時間に縛られない生活をしており、小学校では時間に縛られる生活をしている。その生活のギャップを緩やかにするために、例えば幼稚園から小学校に上がる時に、小学校の生活を見越して、幼稚園の終わりの頃に小学校の生活に合わせたカリキュラムにするよう工夫している。逆に小学校の最初のうちは、2時間つなげて生活科の授業をやってみたりとか、全体としての取組を設けている。また、連携の中で、昨年度は、幼稚園保育園から、「今年はいろいろな子どもがいるから見に来て」と言われ、小学校教頭の立場として、幼稚園保育園にいった。そこで、「この子は運動会のときに、リレーやったんだけど、本番になって、自分が注目浴びたいから、バトンだけ投げちゃって」とか「みんなと一緒に部屋に入れず、幼稚園の中を走り回っている」とかそういったことを聞きながら、様子を実際に見て、その情報を小学校で情報共有した。また、幼稚園の子ども達も3月から小学校の授業の様子を見に来る。もちろん幼稚園の先生も引率してくるので、「こういうふうになるんだね」と子ども達に説明してもらいながら、子ども自身にも小学校の様子を見てもらい、なるべくギャップが生じないような取組をしている。同じことを小中学校でもやっており、小学校から中学校においてその子どもの様子を個別に伝えていくということを行っている。実際に今年度、去年幼稚園で話に出ていた子どもがどんな様子なのか聞いてみると、「バトンを投げちゃった子は、意外と、みんなとうまくなってやっている」といううれしい報告を聞いた。逆に、全然幼稚園保育園で問題がなかった子が、小学校になかなかなじめないということもあるが、全体としてのこの制度を緩やかにつないでいくことと、一人ひとりの子どもの様子を共有していくことで、ギャップを減らすよう取り組んでいる。

【教育委員】

幼保小中の縦の連携の際に、生活リズムや、何ができるかや、この子にはこういう課題があるなどに焦点を当てて幼保小中連携と皆さん捉えていると思うが、私が先程、小学校の先生が幼稚園に教えを請いに行けばいいって言ったのは、そういうところではない。幼稚園保育園では、思うとか感じるとか選ぶとか、自分の感情に向き合うことをすごく大事にしてくれる、そういう教育を一生懸命、仕掛けをつくってやっている。そういうのを、小学校の校長先生などが、幼稚園保育園で、習ってくるといいのではないかなと思っていて。不登校になるとしても、なぜ不登校になるのか自分でも分からない説明もできないということって多分多い。先程、先生からもあったが、外国籍だからという話ではなくて、普通に日本人に生まれて日本語を話している子でも、昔の人からしたら不自由かと思うような、要するに、気持ちとか言葉のグラデーションがない子が時代とともに増えているのではないかなと思っている。だから、小学校に上がってからも、もう少し気持ちを教育の中で取り入れる意識は大事かなと感じる。多分、先輩方からしたら私の40歳は先輩方の40歳に比べて若い。幕末とかで活躍していた人と比べると自分より年下であったりする。今の年齢に1.5ぐらいかけると明治維新ぐらいのときの精神年齢にちょうどなるというような研究があったように思う。今の子どもを見ていて、大人っぽいな、いろんなこと知っているな、すごいなって思うこともある反面、精神年齢が、下がってきていると感じることもある。なので、今まで小学校で当たり前だと思っていたことを当たり前とするのではなく、幼稚園とか保育園で大切にしていたことを小学校でも大切にするという

ことはあってもいいと思う。

【事務局】

普段から不登校とか総合対策についてのそれぞれの考えがあればご発言いただきたい。

【市長】

厳しい視点ばかりではなく、自分が、多治見市すごいなと思うのはこのハイパーQ Uの結果。これは全国平均と比較し、大変高い数字が出ている。片や、不登校児童生徒割合が全国平均より高い。二極化している。ハイパーQ Uが高い理由は何か。

【事務局】

年2回、それから夏休みに専門家による研修を受けており、1回目の結果をもとに、専門家の指導を受けながら、この困り感のある子たちにどういった手だてを打てばいいか具体的な示唆を頂いている。それを毎年繰り返して、教員自体も、それを毎年経験していく中で、いろいろ教員としてのスキルも上がってくるのも一つ成果だと思っている。

年々満足群が上がってきているのは、教員自身の困り感のある子への対応について、いろんな研修を積んでいるので、その積み重ねによって少しずつ上昇傾向にあるのではないかと感じている。年によっては中2だけがぐんと低いとか、そういうときがあるが、総じて言うと、年々、満足群が増加傾向である。ただ、困り感のある子がまだ15%いる。我々は全体がよくなったというだけではなく、困り感のある子たちにいつも焦点を当てて、何らか力になっていきたい、そういう思いを持ち続ける教員でありたいと考えている。

【事務局】

ハイパーQ Uの満足群が高さについてだが、恐らく全国と比較すると岐阜県自体もそこそこ高いと思う。なぜかという、いわゆる学級経営、学級づくりを多治見市も岐阜県も非常に大事にしてこれまでやってきたから。また、教員が小中というふうにセパレートしているわけではなく、小中両方を経験するということも、原則やっているから。どの教師も幅広い学年の子たちに対応する力をつけながら学級づくりをやっている成果で、子どもの満足度は比較的高いかなと思う。そのノウハウを更に不登校で個別に活かせるようにできればと思っている。また、学校へ来られなくても、その子が目的を持って、夢を持って生活できるような、何か手だてを広げていけるよう対策を取っていききたいと考えている。

【市長】

その話をすると結局は教員の質という話に行きつくのではないかと感じる。満足群がもっと増えれば、不登校や不満足も減ると思うので、なぜ不登校になるのか原因を探った時に、教員の質、研修だと言われるんだったら、そこを充実させていくのは一つかなと感じる。

【教育委員】

うちの子は1年生から不登校だった。今は親が付き添って登校している。学校に行けない理由は年齢ごとに変わっていく。1年生のときに行けなかった理由は、本人が言うには、担任の先生がとても元気だが、元気がいい反面、うちの子は難聴で補聴器をつけているからやかましく感じ、息苦しさや、自分のことを分かってくれなかったという思い

があったらしい。また、先生が、他の子に「もう自分でやりなさいね」と言っているのを見た時に、「やり方が分からないのに、自分でやりなさいってことはどういうことか、僕たちに死ねって言うてるのか」みたいなこと言っていた。教師の質のことを一つ言わせていただくと、相談に行くと共感と傾聴をしてくれるが、「でもね、お母さん」と、まま言われた。傾聴とか、共感をご存じだろうが、その対応について教師の質の差異はすごくあると感じる。サービス業であれば、そこは向上してしかるべきところと感じる。その先生の捉え方一つで、「学校はやってくれない」とか、「聞いてくれない」となりかねないと思う。先生に悪意はないと思う。学校に行けなかった時は、担任の先生は毎日、うちの子がいないところで、1日1回は教室で話題にあげ、居場所をつくってくださったところもあるので、一概に先生が悪かったという気はない。ただ、一サービス業の者として感じる場所があった。

【市長】

そこを感じ取れるのが教師だと思っているので、その辺りの訓練、研修が必要である。今後、厳しくご意見を頂いている先生達の学校だとか、クラスを追っていくことも必要かと思う。

【教育長】

教育長としてのコメントって偉そうなことではなく、素朴な感想になるが、こういう問題はどうかすると、個別の事例で、個人の教員がよくないのではないかと責めるような方向へ行ってしまう。それは、物事が違う方向へ行ってしまう気がする。否定的な意見もあるということをして一人ひとりの教員がしっかりと認識をして、自分自身振り返り、どういうやり方が一番いいのか、常に考え直すきっかけになるような題材として、今日の議論は活かしていければと私は思う。こういう指摘があって、このような意見があったということ、会議録とか、校長を通してというとなんか硬くなるので、何かお知らせのような柔らかい形で、是非、全ての教員に、しっかりと伝えてほしいと思う。私自身、その使い方は、これから考えなくてはいいけない。

不登校についてそれぞれ要因があるから要因を分析していくことが必要であると今日議論されたが、一方で、一人の子どもにとって見ると、不登校になったことは、本当に不幸なのかという問題がある。全部ではないが、一部の方は、例えばフリースクールなどで自己実現を感じ取れるような居場所を見つけた子がいる。教育長として言っていることかどうかわからないが、それはそれで大人になるルートとして、周りがみんな認めてあげる部分も、今は、あっているのではないかと私自身思っている。ただし、学校の先生は、フリースクールに通うようになったから関係ないではなくて、いつでも戻ってこられるよう準備し、何らかの接点を持ち続けてほしいと思う。また、不登校者の中にはきっと将来に向けて自分なりの道を見つけている子もいるはずだから、320人という数だけで大変だとすることに少し違和感を持っている。

【事務局】

学校卒業後の進路でもあるが、今、居場所づくりとかフリースクールへの認知も随分、認識変わってきていると思うので、その辺りでお考えがあればお聞かせ願いたい。

【教育委員】

さわらびが効果を上げていて、移動のさわらびもやっている。しかし、子どもの足だけではさわらびに通えない上に、さわらびの開所時間を考えると、親が働いていたらさわらびに通わせられないと思う。駅北庁舎でさわらびのようなことができないか。子どもの話だけではなく、親が仕事があることで、さわらびを選択できないということが発生しないように、もしくは逆に親が仕事を辞めるという選択をしなくていいように、便利のいいさわらびにしてもらいたい。

【事務局】

さわらびはどんなところに設置したらいいかについては、結構議論したことがある。街の中心のすごく便のいいところで、人通りの多いところがいいのか。閑静なところで人が少ないところだからこそ、子どもたちで行きやすいのか。

今の場所は、とても閑静なところで、更にグラウンドが近くにあって、更に別の土地で空いてたら使っていいと言われている。さわらびの子たちが芝生でいろんなボール遊びなど自由にやれる場所なので、大変ありがたい。さわらびは以前から美坂にあるが、南姫のお子さんが自転車で通っていた。バスを使ったりすることもあり、大変すごい経験になる。一つ一つプラスとらえていきたい。ただ、場所はどこがいいのかはいつも悩ましく思っている。こういう駅前だと便利だからどの学校のお子さんでも来やすいと思うが、そういう賑やかなところを子どもは好むのかと考える。

【事務局】

開所時刻については保護者の送迎が多いことも含めて、10時からだったのを今年、9時に変えた。変えたことによって、随分送迎がしやすくなった。ただ、お子さんは10時には間に合うが、登校が早くなったわけではない。

【市長】

発達障害についてであるが、自分は可茂特別支援学校に関わっていた。いろんな保護者の方々とお話をしてきたが、言葉を選ばずに言うと、ここ最近発達障害のお子さんたちが非常に増えてきているという感覚を持っている。全員とは言わないものの、自分の子どもが発達障害、「障害」という言葉がつけられることに非常に抵抗感を持たれる親御さんが多くいらした。しかし、それを受け入れてその子たちに合う教育環境の場所を選んでもらうことが、実は子どもたちにとって今後有益だと自分は思う。

東濃特別支援学校に行くのか、可茂特別支援学校に行くのか、議論になったことがある。その中でお子さんにあった教育環境を選択した保護者の方は、やっぱり行って良かったと言う人が大多数だった。なぜあのときにあんなにかたくなに断ってしまったのか、なぜそこにすごくこだわってしまったのかという発言をよく聞いた。今、発達障害の相談を躊躇される保護者はいらっしゃるかと思う。自分の身近にもいらした。こういうところを教育委員会、教育委員会だけの話ではないが、どう関わっていくのか。発達障害も不登校とまでは言わないが、なかなか学校生活になじめないっていう一つの要因だと思う。そこをどう考えているのか。

【事務局】

確かに市長が言われるように発達に特性を持つお子さんが近年増えてきているというのは学校としても実感している。学校、例えば担任が直接、保護者に言ったところでなか

なか受入れてもらえないということも、承知している。

学校では、特別支援コーディネーターが各学校に配置されており、より専門的な知見から、適切な学び場等について、お話いただく。市教育委員会で巡回相談も行っており、指導教諭の先生であるとか特別支援の先生方、特別支援加配の教頭先生方、場合によっては東濃特別支援学校の先生等もついてきてくださって、実際に見立てをしていただき、この子にはこんな学びの場が適切だろうと助言をしてくださる。それを元に学校が保護者の方に相談をかけている。早い段階できちっと適切な学ぶ場を用意してあげることがその子の後々の人生にとって非常に有益だろうと考えるので、そうした判断ができるように体制を整えている。

【市長】

相談件数は多いのか。

【事務局】

巡回相談の件数は多い。各学校が発達障害を疑って相談に挙げるお子さんは年々増加傾向がある。

【市長】

不登校と発達障害の関連はあると思うか。

【事務局】

正直あると思う。

【市長】

なるほど。発達障害に対し対応していくことが、不登校の子どもたちに対する適切な対応につながっていくのではないかと私自身感じているので、今後、教育委員の皆さんとどういうふうに対応していくか議論を深めたいと思う。

【教育長】

その2つの関連性は確かに感じるころではある。ただ、スクールソーシャルワーカーが個別に自宅訪問等をしており、その記録を見ると、そこには家庭環境の問題、経済的な問題だとか、育児放棄とは言わないまでも無関心な親がいたり、複合的に重なっている事例が非常に多い。だから単に発達障害と不登校が直接的に関係している部分ももちろん例としてはあるとは思いますが、幾つかの要因が重なっており、個別に話を聞く、話をする、何かいい方法はないと一緒に考えるということを丁寧にやっていくしかないのだろうと思う。記録を読むと、スクールソーシャルワーカーや関係者の皆のご苦勞が切実に伝わってくる。

【教育委員】

教育の質という話ができしたが、自分は、教員はいろんな人がいていいと思う。例えば、授業は下手でも、子どもと一緒に遊んだりするだとか、子どものいろんなことを発散させるとか。小学校1年生から中学3年生まで9年間、いろんな先生に会う中で、世の中にはいろんな人がいると、それも含めて学んでいくことが子どもにとってすごく大事なんだと思う。そこから自分はどうやって生きていく方がいいのか考えたほうがいいと思う。それよりも、子どもが助けてって言える環境を作ることが大切だと思う。子ども達にどうしても困った時には助けてと言うことを教えて欲しい。また、子どもから助けを求

められた時に応えられるような体制を作って欲しい。

先程、いろんな教師がいていいと言ったが、不誠実な教員だけはいけない。だが、これから先どうなるか分からない。というのは、今教員が本当に志願者が少ないから。国民全体の問題としてこれから協議して考えなくてはいけない。自分自身の経験でいうと、教員生活は楽しかった。何が楽しかったかという、いろいろ教材研究しながら子どもが喜んだりだとか、子どもと一緒に遊んだりとか、子どもたちの反応を見るのが楽しかったし、子ども達も楽しんでくれたから、それが喜びだった。おおらかに、教員も子ども達も見たい。そんなことを思いながらも、学校訪問に行くが、そのときはできるだけ「先生方頑張ってください、ご苦労さま、健康にだけは気を付けて」と言っている。

【事務局】

不登校対策ということの話題ではそろそろまとめに入りたいと思うが、是非、というご発言はあるか。

今後も引き続き、当然話題にしていくべきことなので、いろんな場でしていく。市長最後にコメントをお願いしたい。

【市長】

皆さんそれぞれ意見がある。私は、是非、この意見を聞いて教育委員の皆さんが考えていただいて、学校現場と連携をとってもらいたい。教育委員が言われるとおり、いろんな先生がいていいと思うが、不登校という議論にフォーカスすると、その問題点は出さないと、何の議論なのかとなる。いろんな個性があっていいで終わってしまう。これは何も意味がない。だから、そこはご理解頂けると大変ありがたいと思う。先生たちが、楽しくやっていただくことが、結果として子どもたちも楽しく過ごしていけるということにも賛同する。またいろいろ議論をさせていただきながら、一緒になってやっていきたい。

【事務局】

今日のメインの議題の不登校についてはひとまずここまでとさせていただく。この機会に事務局から笠原小中学校の進捗報告をさせていただく。

(事務局から進捗説明)

(2) その他意見交換

【教育委員】

笠原小中学校建設についていろいろと意見を言ったが、我が母校という意識がやはりある。地域住民には、どんな学校をつくってほしいとか、応援しているから、どんなことでも言って欲しいという意識がある。地域は強い要望を持っているので、学校としてはうまくやっていただけるとありがたい。特に、私はまちづくり市民会議にも関わっているが、地域というのは強い思いがあるということを知っていただきたい。

【教育委員】

発達障害に関してだが、今は「神経発達症」という言い方もあるので、もしよろしければ活用していただければと思う。自分は他市町村で発達支援をやっているが、「発達障害」という言葉に抵抗がある。

どうしても刺激を求めて動いてしまう多動なお子さんでも、椅子の下に青竹踏みとか、

椅子のところにゴムを1本かけて、足のピンピンやらせるとしっかり座っていただけることが多い。これを先生にご相談したが、危ないと言われて却下されてしまった。個別最適な学びの一環として取り入れていただけたらと要望する。

【教育委員】

中3の娘がおり、高等専門学校に行くことにした。学校に1人の選択で、珍しいことだと思うが、幸いなことに、うちの学校の先生方はとても素敵な先生たちで応援してくださって、無事、娘は合格することができた。高等専門学校を志望する全国の保護者たちとラインでやりとりで、「珍しい選択だから余り理解をされず、高等専門学校の2次募集を県立高校との兼ね合いで、学校から否定されて受けさせてもらえなかった」という話を耳にした。多治見ではそんな事例はないと思うし、ここにいる皆さんのおかげで、多治見の先生たちはいい精神状態で、子どもたちと向き合ってお仕事をしてくださってると思うので、ここで申し上げるまでもないとは思いますが、もし、一般的な進路と違う選択をする子がいたとしても、決して否定することなく、先生たちがその先の人生に責任持てるわけではないので、とにかく可能性は全部サポートしてあげてほしいと思う。

中京学院大学については、多治見市民としては悲願の大学、経営者にとってもバイトが取れないっていうのが多治見の経営者さんの悩みだったので、悲願の大学が来たということだが、教育に携わるというか母親の立場からして議論していただくと、子どもたちに、是非、大学生のお兄さんお姉さんに触れ合う機会をたくさんつくってあげたいと思う。大学に部活とかもあるので、いろんなところで難しくなっている中学のクラブの指導員を依頼するシステムをきちんとつくっていくとか、ボランティアだったり地域のイベントなども、大学生のお兄さんお姉さんたちと一緒に子どもたちが何かできるような機会がいっぱいできてくるといいと思う。

【教育委員】

中京学院大学については、連携の選択肢とか可能性がものすごく増えてくるので、楽しみにしている。

笠原小中学校の校歌を聞いて、非常に分かりやすいと思ったが、小中学校で、校訓はできるのか。

【教育指導監】

教育目標があり、それに付随した校訓が若干ある。

【教育委員】

校歌や校訓を英訳して、校歌は実際同じメロディで歌えるようにすると思う。

学習に関する意識調査っていうのがあって、各科目に関してそれぞれ好きか嫌いかと実際の学力の進捗状況を比べた調査結果があったが、嫌いだが、学力が伸びているケースもあり、どこがどう嫌いなのかが分かってくると、好きであるし、学力も伸びるので、そこを突き詰めていくと、授業の内容とか小中学校の連携にも活かせられると思う。

【教育長】

まず不登校については、多治見市の特徴は、数字だけで言うと、全国より先にピークを迎えた。子どもの数の比率でいくと全国よりまだ少し高めである。だが、取組が一定の効

果は表し始めたのではないかと評価している。これが1点目である。2点目は、一人ひとりの子どもにとったら、表れてくる数字で評価されるのはどうなのかという気持ちになるので、数字は我々がどういう対策をとるかというときに非常に重要な数値なるが、一人ひとりに対応するときには、当然、その子第一でいろいろ対応していかなければならない。

この2面性があるが、本当に難しいと思うのが2点目。不登校以外のことでいうと、中京学院大学が多治見市に移転されるのは、本当にインパクトが大きいことなので、今、激励のご意見頂いたと思うが、2年間の中でどういう可能性が広がるか、これを今から議論をしっかりと始めていく、この教育関係の部署としてもしっかりと議論を始めていきたいというふうに思った。

【市長】

前回以上に、第一部でこんな議論ができた。感謝申し上げたい。私もいろいろ質問させていただいたが、冒頭にお伝えてしている子どもたちが生活する中において、家庭環境のほうが大きいということだが、理解をしている反面、総合教育会議であるので、教育現場がどう関わっていくかに私はフォーカスを当てさせてもらったし、だからこそ教員の質だとかってということも言わせていただいた。それについては、是非ともご理解いただきたい。一概に悪いと言っているわけではなく、皆さん頑張っていたらいるが、それで終わってしまったはその先がないので、市のトップとして、大変厳しいご意見を言わせていただいた。引き続き、こういう議論を通じて、子どもたちの学びの場をしっかりと確保していきたい、居場所の場を確保していきたいと思う。

中京学院大学について、皆さんの大きな期待もあるので、何度も申し上げるが、とはいえ6月の議会で、総合計画の変更とか、いろんな今後の計画とか、今後の調印だとか決まっていくので、第2回目の総合教育会議では、また、中京学院大学についてお伝えをしたと思う。締結内容の中身については、当然ながらその地域の連携だとか、子どもたちの連携ということも私自身も考えているので、そういう部分も、文言を入れさせていただきながら、しっかりと中京学院との連携を図っていきたいので、いろんな部分で、ご理解とご協力を頂きたい。

【事務局】

次回の開催の予定は、今年の9月26日の金曜日、午後3時ということで予定をさせていただいているので、ご予約をお願いしたい。以上で本会議終了とする。